
けいおんIFストーリー 澪編

六甲水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

けいおんIFストーリー 澪編

【Nコード】

N03150

【作者名】

六甲水

【あらすじ】

とある日、澪はある少年と出会う。それが彼女の恋の始まりだった。

けいおんIFストーリー 梓編 憂霧編の続編みたいなものです。

プロローグ（前書き）

六甲水「新連載スタート」

霧夜「設定的には梓編と憂霧編のその後だから、俺らも出るのか？」

六甲水「出ますよ。」

プロローグ

プロローグ

私が3年生になる前の春休みの日、私は大変な目にあっていた。街を歩いていると、いきなり変な男に絡まれた。

男「なあなあ、俺と遊ぼうよ。」

漣「い、いや、わ、私、忙しいので」

男「いいじゃん、俺と遊ぼうよ」

かなりしつこかった。こんな時に律がいたらすぐにどうにかできたのに……

男「ほら、行こうぜ。」

そう言つて、男が私の手を掴もうとしたその時、どこからか、別の男性が現れた。

奏「あー、悪い悪い。こんな所にいたのか」

別の男が私の手を掴み、ナンパしていた男に向かっていった。

奏「俺の彼女に何か用か？」

男「ちつ、彼氏持ちか。」

男はそう言つて、立ち去つた。そして、助けた男が私の手を話した。

奏「大丈夫か？なんか困つてたし、」

漣「い、いえ、大丈夫です。」

男は笑顔で私の頭を撫でてきた。

奏「悪いな。勝手に彼女つていつて、」

漣「いえ、助けるための口実でしたし、気にしてません。」

奏「とりあえず、ああいう男には気をつけるよ。それじゃあ、」

男はそのまま、立ち去ろうとするが、私は呼び止めた。

漣「あの、私、秋山漣です」

奏「ん、俺は神代奏。よろしくな。秋山」

これが、私と彼との出会いだった。

プロローグ（後書き）

六甲水「それじゃあ、新主人公の神代奏くん登場です。」

奏「初めまして、新主人公の奏です。」

雪那「年齢的には、俺達の一個上か？」

奏「いや、同い年だけど、まあ、次の話でキャラ設定やるし、」

霧夜「それは楽しみだ。」

キャラ設定（前書き）

六甲水「今回は神代奏くんのキャラ設定です。」

雪那「どんなキャラなんだろうな」

キャラ設定

キャラ設定

神代奏しんだいそう 1

雪那達と同年で、突如、親の都合で転校してきた少年。困っている人を見ると見逃すことが出来なく、いろいろな人におせっかい者と言われる。だが、その結果、漣と出会うことが出来た。基本的にはいい人。雪那達とはすぐに仲良くなっている。運動と勉強はそこそこ。だが、誰かが困っている時には、凄い身体能力を見せることがある。妹に紡つむぎ 1がいる。小雪とも仲が良い

神代奏しんだいかなで 1

奏の妹で、小雪と同年。今年から桜ヶ丘に入学。ついでに、兄の奏と一緒に暮らすことになったが、奏が大好きで、漣のことを敵視しているが、小雪が説得して、漣との仲を認めるようにしている。同じ漢字なので、そうはかなでの事をかなと呼んでいる

キャラ設定（後書き）

六甲水「以上が、奏くんのキャラ紹介です。」

奏「お互い、頑張ろうな。霧夜」

霧夜「ああ、」

雪那「次は、漣先輩との再会か」

六甲水「いや、転校してくる話です。さらに、小雪ちゃんも入学してきます」

第1話 転校初日（前書き）

六甲水「奏くんの転校初日です」

雪那「俺達と同じクラスか？」

奏「そうなるといいね」

第1話 転校初日

第1話 転校初日

自宅

奏^{かなで}「もうお兄ちゃん。起きて、朝だよ」

奏^{そう}「ん、もう朝かよ。」

妹の奏^{かなで}に起こされ、奏^{かなで}は俺が起きたのを確認し、リビングに戻った。

俺はとりあえず掛けてある制服に着替え、リビングに向かった。

奏^{そう}「そういえば、今日から学校か」

奏^{かなで}「お兄ちゃんは転入。私は入学だけだね」

奏^{そう}「たく、親父め、いきなり転入させられ、こっちに住むことになるとは」

奏^{かなで}「そのお父さんもしかばらく仕事で戻ってこないし、はあ、」

そう、俺の家は特殊で、親父は妹共に単身赴任、俺と母さんは別のところに住んでいたが、母さんが病気で、しばらく入院することになったが、俺ひとりでも生活ができるのに、親父が無理やりこっちに転入させられた。

奏「早く行かないと遅刻するな」

奏「かなで そうだね。行こうか」

俺と梓は一緒に登校していた。

雪那「そういえば、今日、入学式だった」

梓「うん、そうだよ。新観ライブ頑張らないと」

梓は張り切っていた。確かに新入部員が入るのもいいかもしれないが……

雪那（絶対にこゆも入部しそうだな）

梓「そういえば、小雪ちゃんは一緒じゃないの？」

雪那「ん、あいつなら、『二人の邪魔をしちゃ、悪いから』って先に行ったぞ」

梓「そうなんだ」

学校に入り、音楽室に入るため、職員室に鍵を取りに行こうとすると違う制服を着た男子がうろろしていた。少し気になり、声を掛けた

雪那「君、なにしてるんだ？」

奏「ん、少し困ったことが……」

雪那「困ったことって？」

梓「制服からして、転入生？」

奏「ああ、そんな所だけど、職員室どこか分からなくて」

雪那「だったら、俺達も行くから付いて来いよ」

奏「ありがとう。俺は神代奏。よろしくな」

雪那「霧生雪那」

梓「中野梓です」

三人で、職員室に向かうことになった。

奏「そついえば、二人は付き合ってるの？」

奏「の言葉を聞いて、梓は顔を真赤にした。まだ慣れてないのか。

あんなに積極的になつたのに

雪那「まあ、そんな所だ。な、梓」

梓「う、うん。」

そんな事を話していると職員室に辿りつき、俺と梓は鍵を受け取り、奏と別れた。

音楽室に楽器を置き、教室に戻ると義亮たちが揃っていた。

義亮「今日も、二人で登校か。」

純「お熱いですねー」

雪那「あそこのキリと憂はどうなんだ？」

俺達は仲良く話しているキリと憂を見る。

純「あれは、もうなれたよ。」

義亮「そういえば、小雪ちゃんも入学するんだっけ」

雪那「ああ、そうだよ。」

義亮「騒がしくなるな」

そして、先生が来て、全員が席に付いた。

先生「あー、ホームルームだけど、今日は転入生が来ます」

俺と梓は思った。その転入生って

先生「入って来い」

先生の呼びかけに入ってきたのはさっき会った奏^{そう}1だった。

奏^{そう}1「は、初めまして、神代奏^{そう}です。よ、よろしく」

新しい生活が始まった。

第1話 転校初日（後書き）

六甲水「奏そうくんが転入」

奏そう「まだ、秋山と会わないのか？」

六甲水「次に会いますよ」

第2話 再会（前書き）

六甲水「眠い。」

奏かなで「どうしたのよ。」

小雪「作者さん。朝早くから予約したけいおんのゲーム買いに行っただって」

六甲水「めちゃくちゃ面白いよ。Sが取れない」

小雪「ふーん、大変だね」

奏かなで「早く本編進めようよ」

六甲水「今回は漣との再会と奏かなでと小雪がのぞき見します」

第2話 再会

第2話 再会

奏そう「軽音部？」

俺は早速友達になった雪那と霧夜と一緒に話していた。

雪那「ああ、俺はけいおん部に入ってるんだよ」

霧夜「俺の従姉妹も入ってるんだよ」

奏そう「へえー、観に行きたいな」

雪那「別に来てもいいぜ。楽しいから」

霧夜「俺も暇だから来てもいいか？」

雪那「唯先輩がいるけどな」

霧夜「な、何とかするよ。」

奏そう「？」

奏かなで「I s i d e

私は入学して、早速友達になった霧生小雪ちゃんと一緒にある教室に向かっていた。

小雪「早く早く」

奏^{かなで}「そんなに急かさなくても大丈夫だよ」

小雪「もうゆっくりしちゃ、部活が終わっちゃっよ」

奏^{かなで}「時間的にはまだ終わらないよ。まだ3時だよ」

小雪「はっ、教室に忘れ物しちゃった」

奏^{かなで}「もう、急いでるからだよ。私も付き合っ」

小雪「えへへ、取りに戻ろうか」

奏^{そっ}side

音楽室に遊びにいくと……

雪那「こんにちわ」

霧夜「おじゃまします」

奏^{そっ}「おじゃまします」

唯「あれ？ やっくんも来たんだ。そっちは？」

奏^{そっ}「今日から転入してきた神代奏です」

唯「奏くん。……………そーくんでいいね」

奏「そーくんで、あだ名？」

雪那「ああ、」

霧夜「まだ皆来てないんだな」

唯「うん、せつちゃん、あずにゃんは？」

雪那「日直だよ。」

唯「もう、待っててあげなきゃだめだよ」

雪那「何で？」

唯「ほら、早く迎えに行かないと」

雪那「はあ、じゃあな、二人とも」

そう言つて、雪那は音楽室から出て行つた。

霧夜「あいつ、成長したんだかしてないんだか」

唯「そうだねー、やつくんもだけどね」

霧夜「うるさいよ」

しばらくして、遷先輩がやってきた。

とになるな

第2話 再会（後書き）

六甲水「以上が、再会シーンです」

漣「所で、何で小雪ちゃんと私なんだ？」

小雪「雪兄は梓お義姉ちゃんを迎えに行っただけど、」

漣「霧夜と唯はさつきからこそこそしてるし」

小雪「それにしても、どうなるんだろうっね」

漣「何が？」

小雪「ライバルが妹だからね」

六甲水「手強いね」

第3話 新入部員はライバル？（前書き）

六甲水「湊のライバルが登場」

小雪「奏^{かなで}1ちゃんだけどね」

雪那「ネタバレだ」

第3話 新入部員はライバル？

第3話 新入部員はライバル？

小雪 side

新勧ライブが終わり、私と奏^{かなで}1ちゃんはある場所に向かっていた。その場所とは……

奏^{かなで}1「早く行こう。小雪ちゃん」

小雪「もう、そんなに急がなくてもいいのに……はあ、」

私たちは入部届けを持って、音楽室に向かっていたのだった。理由は……数十分前

奏^{かなで}1「私、けいおん部に入る」

いきなりやってきた奏^{かなで}1ちゃんに言われたのは軽音部に入部するという内容だった。

小雪「何で？」

きっと真面目な理由なんだろうな。だって、あんな素晴らしい演奏だったし

奏^{かなで}1「あの、黒髪の人にお兄ちゃんを渡さないようにだよ。」

不順な理由だった。

小雪「奏^{かなで}1ちゃんって、シスコン？」

奏^{かなで}1「ちがうよ。わ、私は、お、お兄ちゃんにはもつとぶさわしい人が」

小雪「そう、なんだ」

そう言うのがシスコンって言うんじゃないのかな？

奏^{かなで}1「というわけで、あの黒髪の人がどういう人か見に行ってくるわね」

何か、偉いことになりそうだな。私も軽音部入ろうと思っていたから、一緒に行くことに

小雪「こんにちわ」

音楽室に入ると、中には元凶の澪姉がいた。

澪「ん、小雪ちゃん。もしかして、入部希望か？」

小雪「うん、そうだよ。あと友達の……ってどうしたの」

奏^{かなで}1ちゃんを見ると何故か地面に突っ伏していた。

奏^{かなで}1「だ、駄目。あんなに綺麗だし、胸も大きいし、スタイルも抜群だし、文句の付け所が……」

澪「彼女は大丈夫なのか？」

小雪「た、多分」

奏^{かなで}「は立ち上がり、澪姉に指を指した

奏^{かなで}「わ、私負けませんから、」

そう言い残し、奏^{かなで}「ちゃんが入部届けを置いて逃げるように帰った。
澪姉はただ呆然としていた。

澪「一体なんなんだ？」

小雪「あはは、なんででしょうね」

第3話 新入部員はライバル？（後書き）

六甲水「ふむ、このまま、漣^{そう}か奏^{そう}1が刺されるといいうエンドも……」

雪那「やめとけ」

霧夜「一応これ、恋愛なんだから」

第4話 初顔合わせ（前書き）

六甲水「今回は奏かなで1ちゃんが霧夜と出会います」

雪那「じゆのことですか？」

六甲水「まあ、そんな感じ」

第4話 初顔合わせ

第4話 初顔合わせ

俺が転校してきてから数日がたった。昼休み、俺と雪那と霧夜と義亮と一緒に購買のパンを買いに向かっていた。

霧夜「結局、お前軽音部に入らなかったんだ」

奏^{そう}「ああ、少し事情があつてな」

本当は新しく何か始めたかったが、俺は家事があるので部活に入らなかったのだった。

雪那「まあ、二人ほど、部員が増えたけどな」

義亮「小雪ちゃんとあと誰だっけ？」

奏^{そう}「俺の妹が入ったんだよな。」

義亮「そうそう、小雪ちゃんと一緒に来たんだよな」

雪那「まあ、二人とも初心者だから、まずは楽器の練習からだからな」

奏^{そう}「そういえば、何をやるか考えてたぞ」

雪那「まあ、自分にあったものからがいいからな。」

義亮「だな。」

購買があるところにたどり着くと、さっきまで話していた雪那の妹の小雪と奏一かなでが一緒にいた。

小雪「雪兄、こんな所で会うなんて珍しいね」

奏一かなで「こんにちわ、雪那さん、それに義亮さん、お兄ちゃんに、えっと、」

霧夜「そういえば、はじめましてだっけ。俺は真堂霧夜。奏一そいちの友達だ。」

奏一かなで「宜しくお願ひしますね。霧夜さん」

雪那「お前らも購買でパンを買うのか？」

小雪「ううん、まだこの学校に何があるか分からないから、色々と探検中なんだ。雪兄は？お弁当作ってたはずだけど、」

雪那「持ってくるのを忘れたんだよ」

小雪「あはは、雪兄。一回梓お義姉ちゃんにお弁当作ってもらったら？」

雪那「一回頼んでみるか」

奏一かなで「お兄ちゃんはお弁当ちゃんと渡したはずだけど」

奏一そいち「俺もまだどこに何があるか分からないから探検だ。昼休み使

って案内してもらおうからな」

小雪「じゃあ、折角だから一緒に行かない？」

俺達は小雪ちゃんの提案で昼休みを使つての学校探検を始めることとなつたのだった。だが、その前、雪那の買い物を済ませないといけなかった

第4話 初顔合わせ（後書き）

六甲水「次回は、学校探検です」

奏^{そう}「本編とリンクとかしないんだな」

六甲水「あとあと、しますよ」

雪那「マジで頼むから奏^{そう}に覗きとかさせるなよ」

六甲水「漣に対して覗きとかしたら、漣が卒倒するからやらないよ」

第5話 学校案内（前書き）

六甲水「今回は学校案内する話です。」

雪那「いい加減、本編と絡ませなきゃな」

霧夜「俺の方も終わりかけだしな」

第5話 学校案内

第5話 学校案内

俺は、奏^{かなで}1の二人で雪那と霧夜と小雪ちゃんと義亮が学校をしてもらうことになった。

奏^{そう}1「ここって、一昨年は普通に女子高なんだっけ」

雪那「ああ、去年から共学になったんだよ。まあ、男子より女子のほうが多いけどな」

確かに、周りを見る限りでは女子が多い。元が女子高だからか。男子はクラスには俺を含めて7人くらいしかいない。全校生徒の中でも20人いるかどうかも分からない。

奏^{かなで}1「そういえば、雪那さんは梓さんとお付き合いしてるんですか？」

雪那「ん、ああ、そうだけど、何でそんな事聞くんだけ？」

奏^{かなで}1「いえ、部室でもいちゃついていたので」

雪那「いちゃついていたって」

霧夜「お前、普通にいちゃつきすぎ」

義亮「俺はもう慣れたけどな」

小雪「梓お義姉ちゃんは将来のお嫁さんだもんね」

奏^{かなで}「結婚の約束まで……すごいです。」

雪那「そこまでしてない。」

義亮「そういえば、奏^{そつ}は？」

義亮の言葉に全員が辺りを見渡すと、いつの間にか居なくなっていた。だが、後ろのほうを見ると女子生徒が何かの書類を落として、それを拾うのを手伝っている奏^{そつ}がいた。

奏^{かなで}「お兄ちゃんの悪い癖だ」

雪那「悪いくせ？」

奏^{かなで}「お兄ちゃん、困っている人を見るとすぐに助けないといけない性分なんです」

霧夜「そうなんだ」

こうして、学校案内はするまえから終わってしまった。

第5話 学校案内（後書き）

六甲水「今回は、大掃除の話です」

梓「結構話的にはどれくらいまでやるんですか？」

六甲水「うーん、まだ決めてない」

第6話 掃除（前書き）

六甲水「今回は掃除回です。」

奏^{かなで}「掃除回とギターを売る話だよね原作は」

六甲水「まあね、で今回は掃除の話だけ、その次にギター売る話を」

第6話 掃除

第6話 掃除

奏^{かなで} Inside

漣「掃除をします。」

ある日の放課後、みんなでお茶会をしていると、突然漣先輩が掃除をすると言い出した。

律「なんだよいきなり、」

漣「これだよこれ」

漣先輩がある扉を開けるとそこは、いろんなもので散らかっている部屋だった。

漣「さつき倉庫の中見たら、凄く散らかってるんだよ。」

雪那「確かに散らかりすぎですねこれは」

梓「そうだね。足の踏み場がないよ」

漣「それに、ちらほら私物らしきものがあるんだよ。なあ、律、唯」

漣先輩が、二人の方を見ると、二人は遠い方を見ていた。

唯「な、何のことだか」

律「わかりません」

小雪「それで今日は部活ではなく掃除ですか？ 澪姉」

澪「そう、意義ある人は？」

澪先輩がそう聞くと、義亮さん、唯先輩、部長さんが手を上げた。
そして……………

義亮&唯&律「「「めんどくさい」です」」」

三人がそろって言った。この三人は本当に掃除が嫌なんだな。まあ私も嫌だけど、

奏かなで「先輩方、さすがに掃除しないと部室取り上げられますよ」

律「うっ、そ、それは」

梓「奏かなで1ちゃんの言う通りです。生徒会にでも見つかったら怒られますよ。」

唯「だ、大丈夫だよ。和ちゃんなら許して……………」

小雪「呼んできて聞いてみますか？」

唯「そ、それだけは」

義亮「どうしても掃除しなきゃいけないか？」

雪那「お前の場合掃除とか面倒だからな。しょうがない。お前はさ
わ子先生のところ行って、女装されてこい。そっちのほうがメンド
臭くないだろ」

義亮「さあて、掃除するか」

こうしてみんなで掃除をすることになったのだった。

掃除を始めて数十分がたった。雪那さんと梓先輩と一緒にゴミを出
しに行き部室にはいなく、小雪ちゃんもバケツの水を替えに行つて
いる。すると、倉庫の中からあるものが見つかった。

奏^{かなで}「漣先輩、これ何ですか？」

漣「ん、これはギターケース!？」

私が見つけたのはほこりをかぶったギターケースだった。それもか
なり年季が入っている。

律「何だお宝じゃないのか」

唯「ちえー、つまんない」

紬「でも、これ、もしかして昔のけいおん部の人のかしら」

漣「そうかも知れないな。」

奏^{かなで}「処分するのはダメそうですね。」

さわ子「あら、みんなで掃除？あら、それは」

すると、さわ子先生がやってきた。そしてさわ子先生が見つけたギターケースに気がついた。

漣「知ってるんですか？」

さわ子「ええ、親戚の叔父さんにもらった奴よ。ずっとここに置いてただけど、出てくるなんて」

奏^{かなで}「先生はこの卒業生で、けいおん部だったんですか？」

さわ子「ええ、そうよ。今度ギター教えてあげるわよ。」

奏^{かなで}「本当ですか？」

唯「はい、これ昔のさわちゃん」

唯先輩が見せてきたのは、凄いメイクをしたさわ子先生の写真だった。もしさわ子先生にギターを教えてもらったら……………

奏^{かなで}「やっぱりいいです」

さわ子「何だよ」

律「それよりこのギターさわちゃんのでしょ、持って帰る？」

部長さんがギターケースをさわ子先生に渡すが、

さわ子（うわ、カビ臭）

何故だか嫌そうな顔をした。そして、

さわ子「私はもう使わないから、これ売って部費にして頂戴」

こうして、ギターを売りに行くことになったのだった。

第6話 掃除（後書き）

奏^{かなで}「最後一気にまとめたわね」

六甲水「な、何のことだか」

小雪「それより私達のパートはまだ決めてないの？」

六甲水「とりあえず小雪ちゃんはギター、かなちゃんはベースで」

奏^{かなで}「かなちゃんって」

第7話 偶然の出会い（前書き）

六甲水「今回はギターを売りにいく話です」

そう「俺の出番は？」

六甲水「ちゃんとありますよ」

第7話 偶然の出会い

第7話 偶然の出会い

漣 side

さわ子先生に掃除中見つけたギターを売りに、私と律と唯とムギと梓の五人で（雪那と小雪ちゃんとかなでちゃんは用事があったり来れず、義亮はめんどいの一言で来なかった。）しばらく歩いていると楽器店に辿りつき、

漣「それじゃあ、お願いします」

店員「はい、それじゃあ、時間がかかりますのでしばらく店内を見ててください」

唯「じゃあ、色々見ようよ。あずにゃん」

梓「はい、……どうしたんですか？漣先輩」

漣「ん、ちょっと近くのコンビニ行ってくるね」

律「なんか買うのか？それだったらギターの方が終わってからでも……」

漣「いや、一人だったら後で買いに行くけど、五人いるんだから迷惑かかるから、大丈夫。直ぐに戻るから」

紬「それじゃあ、私達お店の中にいるから」

四人と分かれ、私は近くのコンビニの中に入り、ある物を探していた。それは……

漣（ボールペンがもう無かったんだよな。折角だから買いに……）

私はボールペンを見つけ、それを取ろうとしたとき、誰かの手に触れた。

漣「あ、ごめ、って、奏一！？」

奏一「ん、秋山。お前もコンビニにいたんだ。」

漣「あ、うん。というか、『秋山』って先輩を呼び捨てか？」

奏一「そう」「ああ、ごめんなさい。俺、一度定着した名前はそのまま呼んじゃうんだ。嫌ならなんかとか努力するよ。」

漣「まあ、特に困らないし、雪那達の友達だから普通に漣でいいよ。」

奏一「そう」「そつちのほうを呼び捨ては嫌だな。さん付けでいいか？」

漣「ああ、」

奏一「そう」「じゃあ、頑張つて変える努力するよ。それより一人か？一人なら送って行くけど、」

漣「大丈夫。近くの楽器店でけいおん部の皆いるから」

奏「『そう』」なら大丈夫だな。それより、かなの奴迷惑とか掛け
てないか？」

漣「大丈夫だよ。いい子だぞ」

奏「『そう』」ならいい。それじゃあ、気をつけて帰れよ」

漣「じゃあな。」

奏「『そう』」side

家に帰るとかなが夕食の準備していた。

奏「『かなで』」あ、おかえりなさい。」

奏「『そう』」ただいま。なあ、部活楽しいか？」

奏「『かなで』」うん、まあ、楽しいかな。」

奏「『そう』」なら大丈夫だな。前みたいなことになっていなくて」

奏「『かなで』」何か言った？」

奏「『そう』」いや、何も」

第7話 偶然の出会い（後書き）

雪那「この二人の過去話とかやるのか？」

六甲水「まあね。ちよつびと小雪ちゃんの過去に関する話しもやるし」

第8話 ある二人の妹（前書き）

六甲水「今回は、かなでちゃんと小雪ちゃんの会話です」

雪那「どんな話だよ」

六甲水「それは見てからのお楽しみ」

第8話 ある二人の妹

第8話 ある二人の妹

奏^{かなで} Inside

私と小雪はある喫茶店にいた。その理由は二つ、一つは雪那さんにいい加減楽器を買えと言われてしまい、楽器選びのため、一緒に出かけている。もうひとつは……

奏^{かなで}「ねえ、小雪は雪那さんのことどう思ってるの？」

小雪「どうって?」

小雪はアップルティーを飲みながら質問を返してきた。

奏^{かなで}「いや、結構仲いいから。その梓さんに嫉妬とかしてないのになって?」

小雪「ううん、嫉妬とかしてないよ。それにかなみたいに私はそこまでブラコンじゃないし、」

奏^{かなで}「ぶっ、」

小雪の言葉につい、飲んでいたコーヒーを吹き出してしまった。

奏^{かなで}「何で私がブラコンなの」

小雪「いや、誰でも分かるよ。明らかに洩先輩に嫉妬してるし、そ

「兄を見てる眼が明らかに好きだっていう目で見てるし、」

奏^{かなで}「小雪ってするどいよね」

小雪「まあね」

奏^{かなで}「それに、雪那さんと梓さんの幸せを見守ってるなんて、私も小雪みたいにそう出来たら……」

小雪「……できるよ。かなは私みたいに早くそうしたいって思ってるなら」

奏^{かなで}「え、」

私は小雪を見ると、いつも明るくニコニコしている小雪の表情が、今は眼が冷酷でただ無感情を思わせる表情だった。

小雪「私は、遅すぎたから……お兄ちゃんを傷つけた。」

奏^{かなで}「え、え、こ、小雪？」

本当におかしい、口調が変わってる。いつも年上の人はず兄とかつけてるのに、お兄ちゃんという呼び方は……

小雪「だから、小雪みたいに同じ過ちは犯さない方がいいよ。神代奏」

奏^{かなで}「こ、小雪。本当にどうしたの？」

小雪「ん、私何か言った？」

奏かなで「え、え、だって、今……」

小雪「今？」

奏かなで「お、覚えてないんだ。何でもない」

小雪「それじゃあ、早く買い物行こう」

奏かなで「う、うん」

さっきの小雪は一体。小雪の真実の姿を知るのは、一年後だった。
それは私達を巻き込み、雪那さんのトラウマを見ることがになるとは
……私はこの時全然思わなかった。

第8話 ある二人の妹（後書き）

霧夜「今の小雪ちゃんは？」

六甲水「まあ、新しい季節に出てくる雪那達の過去話に関係して
かな。」

そう「詳細についてはやらないのか？」

六甲水「それも新しい季節の方でやるよ。今のところ付いてる名前
は黒雪^{こくゆき}1だよ」

第9話 梅雨の日 その1（前書き）

六甲水「唯達の修学旅行と留守番はカットです」

唯「なんでー、」

かなで「お兄ちゃんが関わってこないからじゃない」

唯「そんな理由なんだ」

六甲水「ちなみに長めにやります」

第9話 梅雨の日 その1

第9話 梅雨の日 その1

霧夜 side

霧夜「朝から雨が。」

6月、今日も朝から雨だった。もう梅雨に入ったからだろう。俺は学校に行く準備をしながらつぶやいていた。

憂「霧くん。早く行こう。」

霧夜「うん、待ってて、唯姉さんは？」

憂「お姉ちゃんも待ってるよ。」

唯「やつくん、早く行こう」

霧夜「わかってるって」

こうして、三人で家を出た。だが、この時まさかあんなことになるとは……………

雪那 side

雪那「雨が。めんどくさい季節になった。」

リビングの窓から外の様子を見ている俺、梅雨になると制服は濡れるわ。ジメジメしていやになるわ。洗濯物は乾かないわでめんどくさいことが多い。だが、もっともめんどくさいのは……

小雪「わー、雪兄。髪の毛まとめるの手伝ってよ」

この時期になると普段まつすぐな髪をしているこゆの髪の毛がボサボサになってしまう。それを治すため、この時期の朝は忙しい

雪那「お前、たまには兄を頼らずに自分で治すきはないのか？」

小雪「自分で直してたら遅刻するから頼んでるの」

雪那「あー、もう、ほら、座れ。直してやるから」

小雪「わーい」

奏「side」

奏「雨か。嫌な季節だ。」

俺はのんびりとコーヒを啜っていた。すると奏が深刻そうな顔を
して、頭に帽子をかぶってやってきた

奏「おはよう」

奏「どうしたんだ？眠そうだけど、」

奏^{かなで}「ふふ、この季節は嫌になるよ。なんで、なんで、こんなにボサボサになっちゃうのよ」

そう言つて、奏^{かなで}は帽子を脱ぐと同時に、いつもウエーブが掛かっ
ていて綺麗な髪をしているのが、今日はすごく爆発している。

奏^{かなで}「学校行きたくないよ」

奏^{そう}「馬鹿なことを言つてないで、早く準備しろ」

奏^{かなで}「髪の毛は？」

奏^{そう}「学校でやってやる。てか、小雪にでも頼め」

奏^{かなで}「友達でも頼めないよ」

梅雨になるといつもこうだ。

第10話 梅雨の日 その2 (前書き)

六甲水「梅雨の日の続きです」

かなで「どれぐらいまでやるの？」

六甲水「頑張ってその5までには終わらすよ」

第10話 梅雨の日 その2

第10話 梅雨の日 その2

Side

朝、教室で外を眺める私、私は机に突っ伏している律に話かけた

漣「雨って、いやだよな」

律「本当いやになるわ」

漣「雨って、傘さしても濡れるもんな。ん、ムギどうしたんだ？」

さつきから鏡とにらめっこをしているムギに話し掛ける。ムギは笑顔で、

紬「ちよつとね。」

唯「みんな、おはよう」

漣「ああ、唯おは……」

教室に入ってきた唯は、全身びしょ濡れだった。何故かギターだけあんまり濡れていない。

律「なんだ、水たまりの中に転んだのかお約束なのか？」

唯「違うよ。ギー太を守ったら濡れちゃって、まあ、転んだんだだけ

ど

律「結局お約束か。」

唯「とつさにやっくんの服掴んじゃって、一緒に水たまりの中に……」

漣「霧夜可哀想に」

紬「霧夜くん大丈夫かしら？」

雪那 side

雪那「……………何があった」

教室で、梓と純の髪の毛を梳かしていると、びしょ濡れの霧夜と苦笑いをしている憂が教室に入ってきた

梓「こ、転んだの？」

霧夜「頼む、何も聞かないでくれ。」

憂「と、とりあえず、ジャージに着替えよう」

霧夜「ああ、でも、俺ジャージない」

雪那「俺の貸してやるから」

霧夜「ありがとうな。」

トボトボと歩きながら教室をでる霧夜。それと入れ替わりに義亮と奏一そうが入ってきた。

義亮「何か不幸のオーラを出した霧夜がいたけど、どうしたんだ？」

雪那「分かん。とりあえずそつとしておこつ」

奏一そう「ああ、」

梓「それにしても、いつも一番に来てる奏一そうくんが義亮くんと一緒に来るなんて珍しいね」

義亮「俺も思った。」

雪那「寝坊か？」

奏一そう「違つよ。かなの髪を梳かして遅くなったんだよ」

雪那「何だ、奏一かなでもこの時期髪の毛が爆発するのか？」

奏一そう「ああ、小雪ちゃんも？」

雪那「ああ、いつも俺が梳かしてるんだよ。」

純「だから、さっきから私と梓の髪の毛やってもらってるんだ」

梓「結構上手いんだよ。憂もやってもらったら？」

憂「それじゃあ、お言葉に甘えて」

雪那「こら、俺ばっかりにやらせるな。奏^{そつ}1だって出来るだろ」

奏^{そつ}1「悪い。俺も取り込み中だ」

奏^{そつ}1のほづを見ると、心の髪の毛を梳かしている。

心「んー、いつもは郁^{そつ}くんにやってもらってるけど、奏^{そつ}1くんもいいね。これからもやってよ」

奏^{そつ}1「毎日は嫌だよ。郁^{そつ}斗にでもやってもらえ」

心「郁^{そつ}くんはめんどくさがってやってくれないんだよ」

奏^{かなで}1 s i d e

私と小雪は落ち込みながら歩いている。理由は……一部だけ髪の毛が跳ねてしまってるからだ。

小雪「なんで、雪兄にやってもらったのに」

奏^{かなで}1「私もお兄ちゃんにやってもらったのに……」

小雪「かなで」「はあ」

第11話 梅雨の日 その3 (前書き)

六甲水「けいおんアルバム買ってきたよー」

雪那「通常版か？」

六甲水「いや、カセット付きの限定版。とりあえず、明日聞く」

第11話 梅雨の日 その3

第11話 梅雨の日 その3

昼休み

奏^{そう}l s i d e

俺と雪那と霧夜と義亮とで、弁当を食べているとき、梓と憂と純が慌てて教室に入ってきた。(梓以外はそんなに慌てている様子ではなかった)

雪那「どうした?」

梓「ゆき、ちょっと来て、」

雪那「いや、何で」

梓「いいから」

梓に無理やり連行される雪那。残った俺達もあとを追う。

音楽室

梓「これ見て、」

梓についていくと、音楽室には異様な光景があった。それは……
音楽室に干されている制服等だった。

奏^{そう}「誰かの制服か」

雪那「そうだな。」

義亮「それも女子のか」

梓「三人とも、落ち着きすぎ。誰よ。こんな所に制服を干したのは」

干されている制服を見て、怒る中野。それを見て興味なさそうにする雪那と義亮と純。そして、何故か動揺している憂と霧夜。

奏^{そう}「まあ、誰かがあとで取りに来るんだから、ほっとけばいいよ。」

雪那「そうだな。制服の一枚や二枚ぐらい干してあっても」

梓「はあ、何だか二人の言葉聞いてると怒ってるのがどうでもよくなってきた。」

他の六人と別れ、一人で音楽室に残った。理由はこの制服が誰のなのかだ。まあ、あの二人の反応を見れば、誰のかが分かる。俺は椅子に座り窓から外の様子を見た。

奏^{そう}「雨か。雨は嫌な思いでしかないな。あの日のことを……………」

俺はただ呆然と窓を見つめる。すると、突然音楽室の扉が開き、入ってきたのは漣さんだった。

漣「ん、奏「こんな所でなにしてるんだ？」

奏「ただの退屈しのぎ。漣さんは？」

漣「忘れ物を取りに、」

奏「そうなんだ。それにしてもまた二人っきりですね」

漣「え、あつ、」

俺の言葉を聞いて、頬を赤らめる漣さん。

漣「な、なあ、奏「は どうして人助けするんだ？」

奏「……それはまだ話せませんよ」

俺はただそう言つと、漣さんは少し怯えてる顔をした。

第11話 梅雨の日 その3 (後書き)

六甲水「少しずつ語られる奏^{そう}一の過去です」

かなで「なんで、澪さんは怯えた顔をしたの？」

六甲水「それは次回明かされます」

第12話 梅雨の日 その4 (前書き)

六甲水「今回は溼sideです。」

奏^{かなで}「過去話はいつやるんですか？」

六甲水「その内、梓編の小雪ちゃんの過去話あたりが始まったらこ
つちもやります」

第12話 梅雨の日 その4

第12話 梅雨の日 その4

夜、私はある事について思い悩んでいた。それは……

奏一『……………それはまだ話せません』

奏一の人助けをする理由を興味本位で聞いてみようと思った。けど、その時の奏一の顔がとても悲しそうで、そして、とても怖かった。

漣（私、考えもせずにあんなこと聞いちゃったんだらう？はあ、あとで奏一に謝らなきゃ……………）

次の日、今日も朝から雨だった。傘を指しながら登校していると奏一が見知らぬ女性と話しているのを見かけた。

漣（あいつ、誰と？人助けをしてお礼を言われている感じはしないしな）

それに相手の人はどこことなく誰かに似ていた。私はとりあえず近くまで近づき、隠れながら会話の内容を聞くことに……………だけど、雨が降っている所為か少ししか聞き取れない。

(あ…は、ま…つづけ…)

奏^{そう}1(わ…な。そ…だろ。)

(そ…ね。あ…が、…するのは…のためよね)

漣(全然聞き取れない)

それから奏^{そう}1と彼女は別れ、奏^{そう}1は学校に向かった。

さらに次の日、朝からダルさを覚えた。体は熱く、少し寒気がする。

漣「風邪引いたか。とりあえず、律に連絡を……」

律にはメールを、学校には休むことを連絡した。

第13話 梅雨の日 その5 (前書き)

六甲水「梅雨の日やっと終了」

奏^{そう}「長かったですね」

六甲水「色々だね。さらに今回は急接近です」

第13話 梅雨の日 その5

第13話 梅雨の日 その5

学校 音楽室

律「漣の奴。今日休みか」

小雪「？何かあつたんですか」

部室には今、唯、律、小雪、奏^{かなで}1の四人しかいなかった。漣は風邪で休み。梓と雪那、義亮、ムギは用事があつて遅れてきている。

奏^{かなで}1「この季節に風邪というと、雨にでも濡れたんですか？」

律「まあ、そうなんじゃない？」

奏^{かなで}1「へー、」

漣 side

ふつと目覚め、時計をみると時間は16時。寝たのが10時過ぎ、結構寝ていた。

漣「はあ、やっぱり雨が振ってる中、あんなことをするんじゃないかな。」「

昨日の朝、奏一とどこかの女性が話しているのを盗み聞きをしていたせいで風邪を引いてしまった私、

漣「結局奏一と一緒にいたのが誰か分からなかったな。知り合いか？いや、でも、もしかして、恋人とか」

その瞬間、何故か胸にチクリと痛みが走った気がした。何故か分からなかった

漣（なんだろ？どうして奏一が女の人と話しているのを見るとこんなに胸が痛いんだろ？あれ、そういえば、ずっと奏一のこと考えてる？も、もしかして……恋しちゃったの）

その時、突然、呼び鈴が鳴った。とりあえず出て、扉を開けるとそこにいたのは、奏一と奏一だった。

漣「ど、どうしたんだ？」

奏一「いえ、休んでるって聞いて、お見舞いに」

奏一「風邪の方は大丈夫ですか？」

漣「あ、ああ、まあ落ち着いたかな。ありがとうな、」

奏一「いえ、では、俺はこれで、」

漣「ん、帰るのか？」

奏一「はい、俺はこいつの付き添いで来たんで、それに用事もあり

ますし、
「

漣「そ、そうなんだ？ありがとうな」

奏一そう「はい、じゃあ、あんまり迷惑かけるなよ。かな」

奏一かなで「分かってるよ。」

奏一そうはかなでちゃんを残して、そのまま帰った。何故か少し残念のような、良かったような気がした。

奏一かなで（漣さん、もしかして、お兄ちゃんの好きになっちゃた？ど、どうしよう。お、応援するべきかな？ここは、小雪ちゃんに）

小雪「へえー、これはこれは、面白いことになった」

雪那「どうしたんだ？」

小雪「別に、なんでもなーい」

第13話 梅雨の日 その5（後書き）

六甲水「次回、小雪ちゃんが動きます」

雪那「急接近ってこれかよ。」

紅月「何とかいうか、もっとやるべきことがあるんでは？」

六甲水「それは、あとあとに、次回は、お茶会の話です」

第14話 視線（前書き）

六甲水「今回はお茶会の話です」

奏^{かなで}「それより、お兄ちゃんの過去話は？」

六甲水「それはまだね。」

小雪「梓編でもうすでにやりかけてるのにね」

第14話 視線

第14話 視線

澪side

部室

今日一日、誰かに見られていることが、多い。なので、みんなに相談をしてみた。

律「気のせいじゃないのか？」

唯「案外、さわちゃんが犯人だったりして、」

さわ子「あら、私だったら見るだけじゃ済まないわよ」

律「あはは、確かに」

この三人に相談するのは間違이었다。すると梓が……

梓「もう、先輩方。澪先輩本気で困ってるんですよ。心配してあげてください」

澪「あずさ……というか、雪那、小雪ちゃんは何をしてるんだ？」

雪那と小雪ちゃんは、何故かこっちの話に参加せず、読書していた。

雪那「そりゃ、読書ですよ。」

小雪「もう秋ですから、読書の秋ですし、」

漣「いや、思いつきりまだ夏だからな。」

やんわりツッコミを入れると、突然ムギが立ち上がり、何故か推理小説に出てきそうな探偵の真似をしていた。

ムギ「分かったわ。この事件の犯人はあなたです。」

そう言つて、倉庫の方を指さすと、丁度良く義亮が出てきた。というか、お前もなにしてるんだ

義亮「はあ？何、何の犯人？」

律「お前が犯人か。」

唯「動機は何？まさか、盗撮？」

さわ子「いけないわね。そのビデオを回収します」

三人は義亮を羽交い締めにする。するとムギが何故か止めた。

ムギ「ご、ごめんなさい。ただちょっと真似してみたかっただけなんですけど、丁度良く義亮くんが出てくるなんて、」

漣「何だ、冗談だったのか」

ムギ「でも、理由はわかったわ。漣ちゃん。今朝、焼きそばパン食

べたでしょ」

漣「ああ、朝時間がなくなってる」

ムギ「それって、2割引の奴でしょ」

漣「そこまで分かるのか？」

ムギ「こじ」

そう言っつて、ムギは私の髪についてたシールを外した。

漣「うわ、まさか理由ってこれだったのか」

ムギ「自分じゃわからないものね。多分それが理由でみんな見てたんだと思うわ」

漣「は、恥ずかしい」

唯「てつきりわざとくっつけたんだと思ったよ」

雪那「ツッコミ待ちかと」

小雪「新手のおしゃれかと」

漣「お前ら、気づいてたんなら言えよ。」

私が三人にツッコミを入れると、律があることに気がついた。

律「あれ？かなでちゃんは？」

確かに、まだ奏^{かなで}1ちゃんが来ていない。いつもはちゃんと来るのに

.....

雪那「こゆ？何か聞いてないか？」

小雪「うーん、特には.....」

澪「心配だな。電話してみるか？」

とりあえず、携帯に電話してみたが出る気配がない。一体どうしたんだろ。

奏^{かなで}1「あの、遅れました。」

すると、奏^{かなで}1ちゃんが入ってきた。さらに後ろに和がいた。

澪「どうしたんだ？和」

唯「やつほー、和ちゃん」

和「ちよつと用事があってね。」

奏^{かなで}1「そういえば、さっき扉の前にクラスメイトがいたんですけど、澪先輩の髪にシールがとか、ファンクラブだからとか、言ってたんですけど、」

澪「ファンクラブ！」

まだ、あのファンクラブが活動してたとは、うう、嫌な思い出が...

……

梓「あの、ファンクラブって何ですか？」

雪那「漣先輩ならありそうですね」

小雪「ちなみに、私も面白そうだから入ってます」

漣「面白がるな」

とりあえず、律がファンクラブのことを知らない五人に説明をした。それぞれの反応は……

梓「た、大変ですね」

雪那「まあ、先輩可愛いですし、」

義亮「というか、俺達、その漣先輩にファンクラブが出来た理由の学祭のDVD見たことないですけど、」

奏^{かなで}「確かに、見てみたいですけど」

小雪（まあ、私は見たけどね。）

それぞれの反応を見た限り、小雪ちゃんは『見たことがあります』って顔してるけど、

和「まあ、それでファンクラブのことなんだけど、曾我部先輩が卒業してからあんまりまとめられなくて」

義亮「それ以前に曾我部センパイって？」

律「ああ、知らないんだっけ」

私たちは一年前のことを思い出していた。

第14話 視線（後書き）

六甲水「というわけで、次回は曾我部先輩のことです」

奏^{かなで}「所で、何で雪那さんと小雪ちゃんは読書なんかしてたんですか？秋がどうとか」

六甲水「それは、また後々でやります」

第15話 心の傷（前書き）

六甲水「お茶会を始めることになった軽音部。だけど、奏そう1くんは」

雪那「いきなり、真面目になったな。」

小雪「きつと、お茶会の話をやろつと思っただけど、そろそろ過去話やるつと思っただよ」

雪那「なるほどな。」

第15話 心の傷

奏「お茶会？」

霧夜「うん、何か溇先輩フアンクラブのお茶会を開くからって、俺と憂は用事があるから、奏「代わりに行かないか？」

放課後、霧夜に呼び止められ、お茶会を誘いを受けた。本当なら行きたいところだけど、

奏「悪いけど、俺も今日用事があっていけないんだ。」

霧夜「用事？何だ？」

奏「さあな、私用だ」

俺は電車に揺られること一時間、電車を降り、駅から10分歩き、着いた場所は墓地だった。そしてある墓の前に立ち止まった。何の飾り気もない墓にかかれている名前は……

奏「久しぶり。千歳」

溇side

第15話 心の傷（後書き）

六甲水「次回はデートです。」

雪那「デートねえ、まさか、小雪」

小雪「もちろん、監視に行きますよ」

白雪「いいな、」

霧夜「そういえば、キャラとしては本編に出れないんだっけ」

六甲水「こんな事もあるとかと、白雪ちゃんにスポットが」

雪那「以前言ってた。いちご編か？一応別世界でやるって言ってたけど、」

六甲水「ゲストというか、平行世界な感じで、また妹キャラとしてだけど、」

奏^{そう}「妹キャラ好きですね。」

瑠璃「ロリコンな上にシスコン。誰かに似てるわね」

第16話 デートと過去（前書き）

六甲水「今回は、デートと奏そう一いちくんの過去が始まります」

小雪「果たして、千歳とは」

白雪「そして、先生との関係は」

第16話 デートと過去

日曜日、奏^{かなで}1ちゃんに言われるまま、奏^{そう}1とデートをすることになった。奏^{そう}1の方は嫌がることもなく了承してくれた。それにしても、デートなんて……は、は、は、恥ずかしい。

奏^{そう}1「溼さん？お待たせしました」

溼「そ、しょう。ききき、来たか」

奏^{そう}1「え、ええ、あの何か様子おかしいですけど、」

溼「そ、そんな事無いぞ」

奏^{そう}1「はあ、じゃあ、行きますか？」

溼「おお、そうだな」

二人の様子をみる二人の姿があつた。それは……

小雪「あは、溼姉、噛みまくってる」

奏^{かなで}1「だ、大丈夫かな？」

小雪「二人が動いたよ。早く行こう。」

奏「う、うん。」

しばらく私と奏は色んな場所を歩き回った。服を見たり、一緒にお昼を食べたり、そんな中奏は困っている人を見るたびに助けていた。そして、夕方

漣「いっぱい回ったな。」

奏「結構、疲れました。そろそろ、」

すると、近くの公園からボールが飛び出し、ボールを取ろうと子どもが拾うとして飛び出した。すると、トラックが子供の目の前に…

漣「きゃ」

奏「危ない。」

奏は咄嗟に飛び出し、子供を助けようとした。私はつい目を瞑った。

奏「ふう、大丈夫か」

子供「あ、ありがとう」

運転手「だ、大丈夫ですか。すみません。」

奏「いえ、誰だって間違いがありますよ。ほら、君も謝ろうか」

子供「ごめんなさい」

運転手「いや、ケガがないなら、」

奏「うわ、ごめんなさい。つい、飛び出しちゃって」

漣「あ、あ、」

漣さんを見ると漣さんは泣いていた。

奏「うわ、ごめんなさい。と、とりあえず、落ち着いてください。」

しばらく公園のベンチに座らせ漣さんを落ち着かせる。何とか漣さんは落ち着いた。

漣「お、お前バカだよ。何であんな風に人助けするんだよ。教えてくれ、何でお前は人助けするか」

奏「……少し長くなりますよ」

漣「ああ、」

第16話 デートと過去（後書き）

六甲水「ついに奏^そ一の過去話がはじまります」

小雪「私みたいに無理やり人格変貌とかむりやりなことやるの？」

六甲水「多分やらない。」

瑠璃「はつきりしないわね。」

第17話 千の歳月（前書き）

六甲水「今回は奏^{そう}一の過去話です」

雪那「てか、久しぶりの投稿だな」

六甲水「違う方進めてたからね。今回はシリアスです。あと、若干、梓編のネタバレが……」

第17話 千の歲月

俺と奏一かなでは親がない。本当の両親はすでに死んでいる。今は俺たちを拾ってくれた人の家で住んでるんだけど、その家にはもう一人子どもがいたんだ。それは……千歳。

千歳「奏一そいつ朝だよ。」

奏一そいつ「あ、ありがとう。千歳。」

千歳は明るくよく俺たち兄妹の面倒を見てくれたんだ。そんな千歳のことが好きだった。けど、三年前に、千歳が事故にあった。

雨が降る中、俺は千歳が運ばれた病院に駆け込んだ。手術室の前に母さんと父さんと奏一かなでが深刻そうな顔をしていた。

奏一そいつ「母さん。千歳は？」

「奏一そいつまだ手術してるんだって、」

母さんは今にも泣きそうな顔をした。何故、千歳が事故なんか……その間に父さんが答えてくれた。

「千歳は、轢かれそうになった子供を助けるために……」

父さんは拳を震わせていた。そうだ、この人達にとって、千歳は大

事な子供だ。きっと、俺達の時もこんなふうに……

しばらくして、主治医らしき男が出てきた。

霧島「主治医の霧島です。」

「千歳は大丈夫なんですか？」

母が主治医に詰め寄る。主治医は笑顔で言ってきた。

霧島「大丈夫です。一命は取り留めました。しばらく安静が必要ですがね。それと、親御さん少しいいですか？」

「はあ、」

主治医と両親が別室に入っていた。この時何の話をしていたか知らなかったが、それは後々になって知った。

退院してから数日後、千歳は手首を切って自殺していた。いきなりのことで何が何だか分からなかった。だが、遺書らしき物に理由が書かれていた。

「突然、こんな手紙を残して死んでしまった私を許してください。でも、私が死ぬ理由は、罪滅ぼしです。私はクラスメイトの一人をいじめていました。みんながやっていたから私もやってみようと軽い気持ちでやっていました。けど、その子は私達のせいで誰かを傷

付けるようになってしまった。この間、主治医の先生と共に彼女が来て、びっくりしました。彼女は会うなり私に謝ってきたのです。それで私が行ったことを許すと……でも、それからです。私が今まで行った罪を意識することに……彼女は私が行った罪を許してくれただけ、私は駄目だった。自分自身を許せなかった。この罪を消すには、私が死んで償うことです。母さん、父さん、こんな惨めな娘をどうか忘れてください。奏^{かなで}1、優しい性格で友達を大切に、奏^そ1、私みたいに誰かを傷付けることはしないで、誰かのために役に立てることを……そして、ごめんなさい。白雪ちゃん。』

それから、主治医の先生が両親に話した話は、千歳は子供を助けて車に轢かれたのではなく、自分から飛び込んで轢かれたのだ。目撃者からの証言から子供を助けて轢かれたと見間違っただけらしい。

ある日、主治医の霧島先生に呼び出された。そして、先生は淡々に言ってきた。

霧島「やはり、彼女は死を選んだか。」

奏^そ1「あんだ、千歳が死ぬことを知ってたのか」

霧島「大体の予想は付いていた。それがどうした？」

奏^そ1「じゃあ、何で止めなかった。」

霧島「彼女の選択だ。他人が口をだす必要はない。それに私は医者でも善人ではなく悪人だ。」

奏^{そう}「ふざけんな、俺はあんたを一生許さないからな。一生」

霧島「なら、一生恨めよ。小僧」

第17話 千の歲月（後書き）

六甲水「奏^{そつ}と千歳さんの過去話です。どうだった？」

雪那「まさかの梓編の小雪の過去話とリンクかよ」

白雪「……千歳さん」

小雪「罪の償い方が大事か。背負うか、償うか。」

千歳「私は生きて罪を背負うか、死んで償うか選んで、死を選んだんだよ」

小雪「うん、分かってるよ。」

六甲水「次回は、過去の話聞いて澪の行動は……」

千歳「お楽しみに」

最終話 漣の思い・奏一（そう）の思い（前書き）

六甲水「漣編今回で最終回です。」

漣「話的にはクライマックスだしな。」

奏一「では、どうぞ。」

最終話 漣の思い・奏一(そう)の思い

私は、奏一の過去を聞いて、少し戸惑った。あんなに優しい奏一が誰かのためにこんな思いをしているなんて、

奏一「すみません。つまらない話して、俺には分からないんです。いつまでこんな事を続けていればいいのか。それに、たまに思うんです。千歳の罪を俺が代わりに償っているって、」

漣「多分、それはちがうとおもっぞ。」

私は奏一に抱きつき、言い聞かせた。

漣「私は千歳さんに会ったことはないけど、千歳さんは奏一に罪を償ってもらっているんじゃないんだ。奏一に自分が行ったこと過ちをやってほしくないから、いつまでも優しい心を忘れないで欲しいんだ。」

奏一「漣さん。でも、そんな思い。忘れようと思っても、思い出してしまうんだ。俺は千歳の操り人形だって、」

奏一は涙を流しながら言った。今の奏一は心がもうボロボロなんだ。私は奏一にキスをした。かなり恥ずかしかったけど、今の奏一を落ち着かせるためにはこれだと思い…キスをした。

奏一「漣さん？」

漣「こ、こ、こ、こ、これは、お前がまた辛そうになったときに使う呪いだ。私はずっと、お前の事を支えていきたい。ダメか？」

奏「い、いえ、ダメじゃないですけど、その、それって告白ですか？」

漣「え、あつ、」

改めて言われると、たしかに告白みたいだ。やばい凄く恥ずかしくなった。

奏「俺も漣さんのこと好きですよ。だから、これからよろしくお願いします」

漣「こ、こちらこそ。」

こうして、私たちは恋人同士になった。

小雪 side

草むらのなか、私は二人の話を聞いていた。奏「ちゃんかなでは買い忘れがあるらしく、ちょっとまえに帰った。

小雪「千歳ちゃんか。まさか、そー兄の家族だったんだ。知らなかったな。でも、そー兄は知らないよね。本当のことを、あの遺書は千歳ちゃんが書いたものだけど、一部変えられてるって、ちよつと時間を置いて、話そつと。さて、今日は梓お義姉ちゃんが遊びに来てくれる日だね。わくわく」

最終話 漣の思い・奏1（そう）の思い（後書き）

六甲水「漣編終わったね」

雪那「まで、最後の小雪のセリフの謎は明かされないのか？」

六甲水「それは、梓編でやるって言わなかったっけ？」

雪那「聞いてねえよ。」

漣「ということは、過去じゃなく、現代の方に私の出番が……」

六甲水「あるよ。とりあえず、最終回だけど、明かされてない謎は梓編でやりますから、少し待っててください」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0315o/>

けいおんIFストーリー 澁編

2010年11月21日02時18分発行